

新羅印花文土器三例

宮川 禎一

はじめに

現在、京都国立博物館には新羅印花文土器が複数収蔵されている。本稿ではそのうち統一新羅時代の土器を研究するうえで重要と考えられる三点を紹介してみたい。

一点は大阪府高石市在住の個人の方から御寄託いただいている印花文細頸壺である。

一点は平成十九年に滋賀県大津市の原野日佐芳様から博物館に寄贈された印花文骨壺である。

一点は大阪市在住の個人の方から御寄託いただいている大型の印花文広口壺である。

いずれも韓国の統一新羅時代の印花文土器の典型例であり、写真や実測図を公表する意義は高いと考える。以下それらの作品の観察とその時代的位置づけや重要性について述べていくことにしたい。

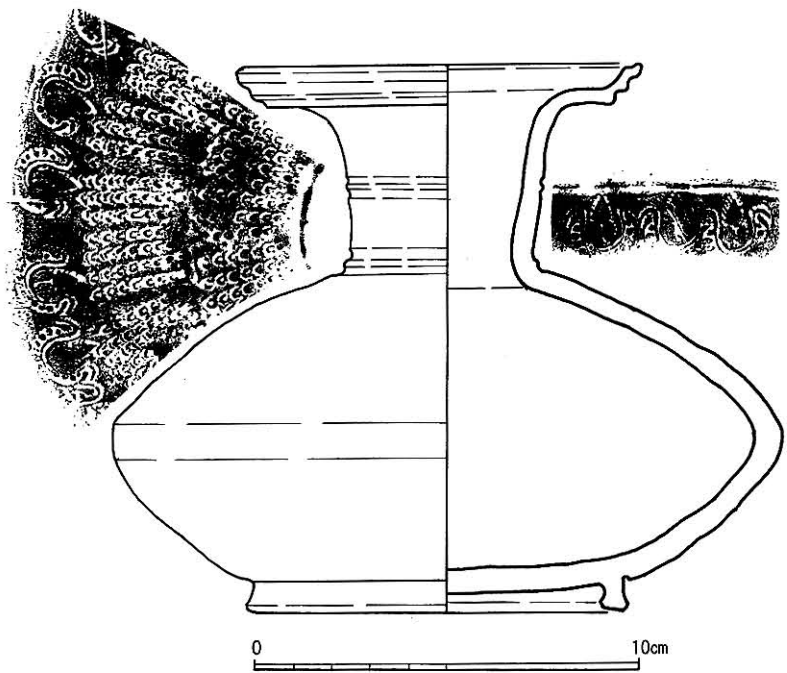
1 新羅印花文細頸壺 一口 (図版3・6、挿図1)

平成十九年に大阪府高石市在住の個人の方から京都国立博物館に御寄託のお話をいただいた細頸壺である。一見して新羅の細頸壺を代表する形と文様を備えていることが分かったために、所蔵者に博物館への寄託をお願いし、現在博物館で保管している資料である。

本資料はその個人の方が古美術品収集の一貫として日本国内で購入されたものという。出土地や伝来などの情報は無い。箱書きなども無い。

総高一四・四cm。口径一〇・六cm。胴径一七・四cm。脚台径九・八cm。灰黒色で体部上面に濃褐緑色の自然釉が比較的均等にかかっている。胎土は精良。焼成は堅緻である。口縁・頸部・体部とも丁寧な横ナデが施されており、その出来映えは上質といえる。

口縁部は受け口状である。保存状態の良いものなら落し蓋のような蓋をあわせもつのだが、本例はすでに蓋を失っている。口縁外面には二条の凹線が巡る。



挿図1 新羅印花文細頸壺 S = 1/2

頸部は細く、ややゆるやかに上方にひらく。頸部の中心には二条のあざい凹線が巡る。その凹線の下側には後述する合成文が押印される。頸部と体部の

境には一段の稜が巡る。体部はこの型式の壺に通用であるが、しもぶくれの扁平な形状である。体部上面には縦長連続文（A手法）が二段と頸部にもあった合成文が施される。体部下半から底部・脚台にかけては文様などない。

脚台は高〇・八cmと低く、外方へは踏ん張らない。やや勢いのない脚台といえる。

本例に施された文様は次の二種類である。

・合成文 合成文としても変わった文様である。あまり見かけたことのない特徴的な形状である。列点を主体とする小さな水滴形文と大ぶりの馬蹄形の連珠文を組み合わせたような形である。縦二・〇cm、幅一・九cm。文様のつくりは精緻である。非常に特徴的なかたちの文様であるので、同印の作品が発見される可能性が高い。

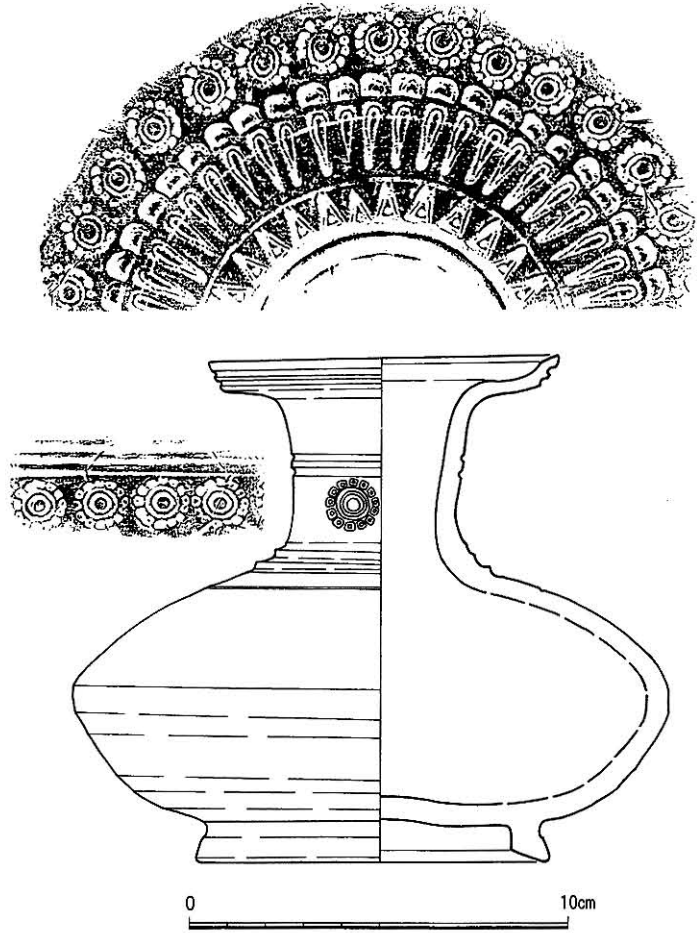
・縦長連続文（連続馬蹄形文） 印花文土器の文様としては典型的な文様。小形のU字形を上下に八段連ねたものである。長二・八cm、幅〇・四cm。縦長連続文としては馬蹄形を残しているので比較的古いものといえることができる。しかしながら最古段階ではない。その施文手法は押しは離す単純な押捺なので、筆者のいう「A手法」である。類似の文様は数多いので同印関係を証明することはやや難しいとみられる。文様としては典型的である。

本資料と対比できる作品をかつて調査したことがある。それは奈良市の大和文華館が所蔵する印花文の細頸壺である。この作品については『大和文華』第八十九号^{（註1）}に詳述した（挿図2）。今回寄託を受けた細頸壺と比較すると、考えるべき点が多いことに気付く。

大和文華館例は総高一三・五cm。本例よりはほんの少し小さい。しかし体部の張りは本例よりもやや強い。脚台もやや高く、外方へ踏ん張っている。頸部の二条凹線や肩部の稜はしっかりと明瞭である。その形状だけでも先後関係がみえてくる。

また文様を比べると、大和文華館例では、縦長連続文は用いられておらず、頸部には多弁花文、体部には三角形文・合成文・多弁花文を放射状に押印している。

両者を比較すると、今回報告の細頸壺は大和文華館例よりはやや時期の下るものといえてよい。本例が縦長連続文をもっている点が



挿図2 大和文華館所蔵の印花文細頸壺 S=1/2

決定的である。また特殊な形状の合成文が大和文華館例の合成文の変遷の延長線上にあることも明らかである。合成文上半の水波形がのこり、下半の円弧状の文様が大きく発達したのが本報告例の特殊な形状の合成文となったのであろう。

本例や大和文華館例のような「細頸壺」という器形は、新羅印花文土器の製作の本流にあったものとみなされる。連続する製作の系譜のなかで生産されたものであろう。その生産地は慶州周辺の窯場であろうことも推察される。緊張感をもった丁寧な施文と、端正な器形の様子から、その産地を慶州周辺以外に求めることは難しい。印花文土器の地方色については未解明な部分が多いのも確かだが、

慶州以外の地域ではあきらかに慶州産のものよりも質の落ちる作例があるようである。器形がアンバランスであったり、文様が下手であったりするものが地方には見受けられる。

製作時期については、大和文華館例が七世紀後葉頃（縦長連続文はないけれども、その出現直後の時期のもの）とみられるので、今回報告の本例はそれより数年から数十年ののち、七世紀末から八世紀初頭頃の製作かと推定される。

両者は、印花文土器の文様と器形とが相互に連動して時間的变化を遂げるものであることを示す好例といえる。

本例のように体部の扁平な細頸壺はじつは日本の奈良県飛鳥地域や大阪府下での出土例が多い。その代表は飛鳥石神遺跡出土品である。その他、全体の形状を復元できないものの、明らかに細頸壺の破片と見られる印花文土器の出土は日本国内では散見される。

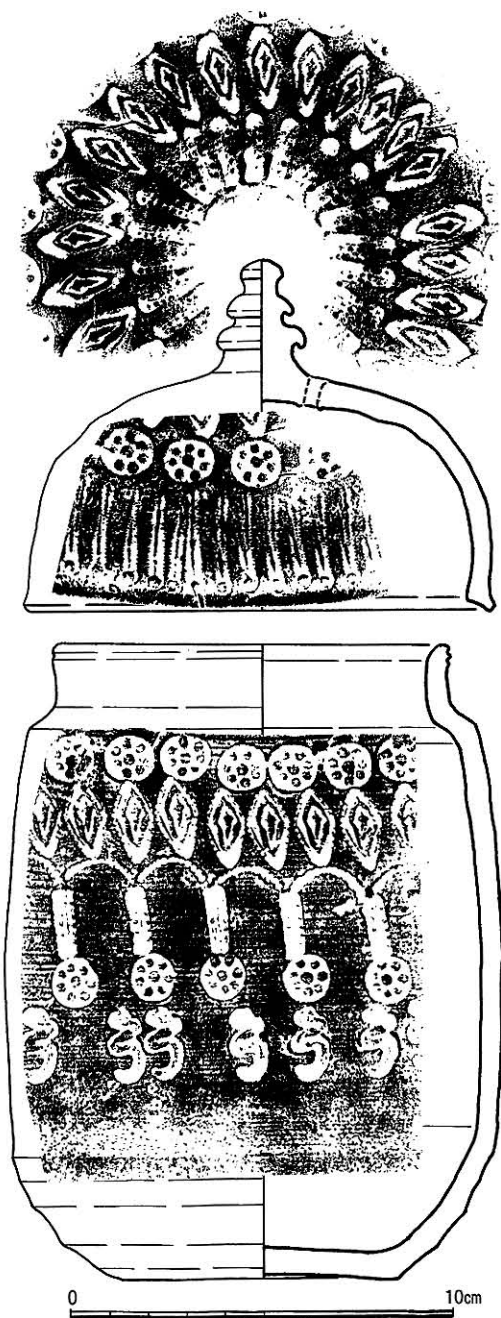
慶州の遺跡における印花文土器の破片の大多数が日用品である椀・皿類であるのに対し、日本で出土する印花文土器片には椀・皿の個数に比してこの細頸壺という器形の多さが目立つ。七世紀後半から八世紀にかけての新羅からの輸入品にこの形状が多かったのだ。それは江浦洋がいうように壺に入れられた内容物にこそ意味があったからであろう。

本稿のような完形資料の報告は日本出土の印花文土器を検討する際に役立つものと考えられる。

2 新羅印花文骨壺 一合 (図版4・7、挿図3)

本土器は平成十九年一月に滋賀県大津市の原野日佐芳氏より京都国立博物館に寄贈されたもの。現在京都国立博物館の所蔵品である。土器の出土地・来歴などは不明。蓋をもつ壺形の陶質土器である。土器の表面にスタンピング文様をもつもので、明らかに統一新羅時代の慶州付近で生産された印花文土器である。火葬骨壺の内容器とみられる。日本には古く持ち込まれたものらしいことはその古びた収納箱から推測される。その時期は二十世紀の前半か。

総高二三・八cm。蓋高九・一cm。身高一六・七cm。身口径一〇・五cm。背の高い細身の体部に丸い蓋がのる形状。蓋のつまみは中実であり、三重笠形の形状をとっている。蓋のつまみの周囲三箇所には鋭利なナイフ状の工具によってあけられた透かし孔が見られる。



挿図3 新羅印花文骨壺 S=1/2

土器全体は灰黒色で硬質。表面に薄い自然釉がかかる。くぼんだ文様部分には白色の石灰状の付着物がみられる。土器表面は粗い横ナデが施されている。身下方と底面は回転ヘラ削りされている。土器の重厚な質感は新羅土器の典型であり、日本の奈良時代の須恵器とはその雰囲気がおおいに異なっている。

本例のスタンピング文様について詳述してみよう。

まず蓋の文様である。頂部つまみの周囲から口縁部にかけて四段の文様が放射状・带状に施されている。

1 段目、縦方向の二条連珠文。長一・九cm。

2 段目、縦置ききの菱形文。長二・三cm。

3 段目、小型の多弁花文。周囲は円形で七弁。直径一・四cm。

4 段目、変形の水波形文。長二・六cm。

次に身側面の文様である。带状に五種六段の文様帯を成している。上から下へ順に記述すると

5 段目、小型の多弁花文。

蓋の3と同じ。

6 段目、縦置ききの菱形文。

蓋の2と同じ。

7 段目、一条弧線の横長連続文。幅二・〇cm。

蓋の1と同じ。

8 段目、縦方向の二条連珠文。

蓋の3と同じ。

9 段目、小型の多弁花文。

蓋の3・身の5と同じ。

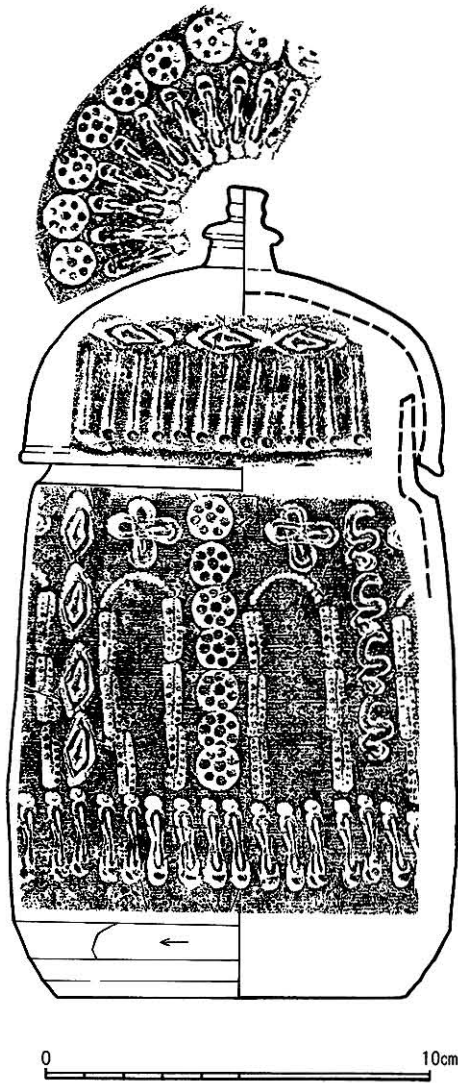
10 段目、変形の合成文。

「3」字の形状に近い。

以上が文様のすべてである。全体は10段の文様帯をもち、文様は重複があるので六種類であった。新羅土器の施文のありかたとしては普通である。次にひとつひとつの文様について検討しよう。

蓋1段目と身8段目で用いられた縦方向の二条連続珠文は通常は横方向におかれる横長連続文の一種である。文様を横方向に接続する文様であり、縦方向には用いられないのが普通であるが、本例のような縦方向への施文がありうる。一見、縦長連続文のようにも感じられる。しかしながら、身8段目にみられるように不均等な配列がその性格を示す。一般に縦長連続文を施すのは身を全面的に一周する施文のためであり、このような垂れ下がる文様としては用いられない。あきらかに縦長連続文の用法とは異なる。すなわち作者の意識としてこれを縦長連続文とは認めていなかった証である。横長連続文の転用とみてよいだろう。

蓋2段目の菱形文は印花文1式の水滴形文から現れた文様で、2



挿図4 関西大学博物館所蔵の
印花文骨壺 S=1/2

4式の段階に広く用いられた。周囲の列点の精粗によってその後関係が明らかとなる。本例は周囲の列点が残っているので、中間くらいに置けるものである。

蓋3段目と身の5・9段目の三段に用いられた多弁花文(円形)は多弁花文の中では小さな方である。2式以降に現れる文様である。その形状はくつきりしているのでそんなに古くも、また新しくもないものである。

蓋の4段目に用いられた変形の水滴形文は印花文1式(縦長連続文出現以前)の水滴形文を上下に引き延ばしたようになったもので1式よりは時間が降るものである。2式段階によくあるトンボの胴体状の文様(目にあたる珠文がふたつあるのでトンボの胴体に見える)と関連があるであろう。

身の7段目にあたる弧線の横長連続文は列点による「一条弧線」である。弧線が二条のものが4式には普通なのでそれらより古いものと考えられる。

身の最下段にある蛇がくねったような変形の合成文は大変特徴的な形状である。類例は少ないが、同印の判断は容易である。

本例の文様は基本的に「横位文様帯構成」をとるもので、印花文土器の生産の盛んな段階の遺物といえる。明確な縦長連続文のC手法はもたないが、C手法が全盛の4a式、八世紀の前半から中葉頃の製作と考えることができよう。

実は本例の最大の注目すべき点は、本例と兄弟とみられる作品の存在である。それは関西大

学の博物館が所蔵する同形の骨壺である。以前、筆者が関西大学博物館所蔵の印花文土器を調査した際にその骨壺も実測をおこない、論文に掲載したことがある^(註4,5)。

関西大学例(挿図4)は総高二・八cm。今回報告の骨壺より1cm小さいだけで、ほぼ同じ大きさといえる。その背の高い形状も、つまみの形状がやや異なることを除けば近似している。また文様も一見よく似ている。似ているだけでなく、同印の施文が見られる。文様を具体的に比較してみよう。関西大学例では八種類の文様を施文に用いている。京博例では六種類であった。

〔京博例〕

縦方向の二重連珠文 (同印) 縦方向の二重連珠文

菱形文 (同印) 菱形文

多弁花文 (同印) 多弁花文

変形の水波形文 (同印) 変形の水波形文

一条弧線の横長連続文 (同印) 一条弧線の横長連続文

変形の合成文 (同印) 変形の合成文

なし けし状の合成文

なし 繭形の合成文

〔関西大学例〕

すなわち関西大学例の文様八種のうち京博例と同文様のものが六種類あったのである。かさならない二種は関西大学例にのみ見られた文様である。

ふたつの土器はその大きさ・形状・文様とも非常に近似したものである。ただ「文様構成」はやや異なる。京博例はオーソドックス

な横位文様帯構成をとるのに対して、関西大学例は体部の文様の多くを縦方向へ配列するという奇異な配置をとっているのである。通有の印花文土器には見られないユニークな文様配置なのである。施文を行なった工人の癖、あるいは遊びのようなものかもしれない。

このように細部を比較してみると、両者の製作された工房は同じである可能性が非常に高いことが分かる。文様原体(スタンプ)の共有と形状の近似がそれを示している。また両者の先後関係を推定することは現状では難しいものの、製作時期もそんなに離れてはいないようだ。同日の製作ということはないだろうが、離れていても数年以内のことであろう。このようにスタンプ原体を共有する作品群を比較検討することは、印花文土器の生産活動を復元するうえで重要な情報をもたらしてくれる。具体的には生産工房のグループの細別が可能となるであろう。

以前にも検討したことがあるが^(註6)、新羅の都慶州の周辺には花山里や花谷里などで複数箇所の窯跡が確認されている。七世紀後半から九世紀にかけての統一新羅時代において、慶州の周辺には印花文土器生産工房が同時期に複数並存していた可能性がひじょうに高い。同一時期に一箇所だけの生産というわけではなかったであろう。すなわち時代の様式の特徴を帯びながらも、窯場ごと、あるいは工人グループごと、さらにいえば工人ごとに、その器形や施文の傾向の違いを見せていた可能性が考えられるのである。そのような生産細部のありかたを考えるうえでもこのような同印を共有する土器相互の比較検討はとても重要なのである。

印花文土器全体の位置づけとしては、京博例・関西大学例ともに縦長連続文を持たないものの、その文様の多さや文様形状の特徴が

らみて、縦長連続文出現以降の3式から、C手法があらわれた4a式にかけての段階と考えられる。印花文土器の施文のピークにあたる作品といえる。時期的には七世紀末から八世紀前半頃に置けるものであろう。

またその用途は火葬骨を納める骨壺の一種とみられる。印花文土器の代表的な器形は、身と蓋に両者を固定するための把手をもつ、いわゆる「連結把手付骨壺」である。今回報告の資料は把手をもたないが、その大きさが通常の連結把手付骨壺の大きさよりも二まわりほど小さいうえに、脚台なども持たないことから、連結把手付骨壺の内部に納められた「内容器」である可能性が高いと考える。外容器である連結把手付骨壺は外側にあるだけに埋納中、あるいは出土時に破損する機会が多いのではなからうか。それに対して内容器の方は壊れる比率が低いと思われる。本例も関西大学例もそのようにして残った骨壺内容器であると考えておきたい。

またこのことは、このグループの内容器を納めた外容器の発見にもつながる可能性があるということである。内容器の文様と外容器の文様とは共通する場合が多い。将来的にスタンプ原体を共有する外容器の存在が確認される可能性を指摘しておきたい。

さらにこのような形状の印花文土器は日本国内ではほとんど出土しない。新羅において骨壺専用の容器として生産され使用されているので、日本へ持ち込まれる必然性が全く無いからであらう。その点では前掲の印花文細頸壺のありかたとは対照的である。

3 新羅印花文広口壺 一口 (図版5、挿図5)

本例は大阪市在住の個人の方から寄託いただいている資料である。現存する印花文壺としては大型のもの⁵⁷。出土地などは不詳。口縁部に一部補修があるものの、これだけの大きさの壺がほぼ完存していることはそれだけで評価できる。

総高三六・九cm。口径一四・八cm。胴径は三一・五cm。

青灰色で硬質。口縁部は外方へ開き、一条の段をもつ。体部は下ふくれの球形。底部には脚台などはないが、やや窪んでいる。体部の肩には二条の明瞭な突帯が巡っている。体部中位から底部にかけては格子状の叩き目があり、そのうえに横方向のナデが施される。内面には文様などはなく、基本は横ナデである。

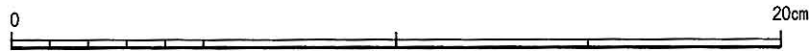
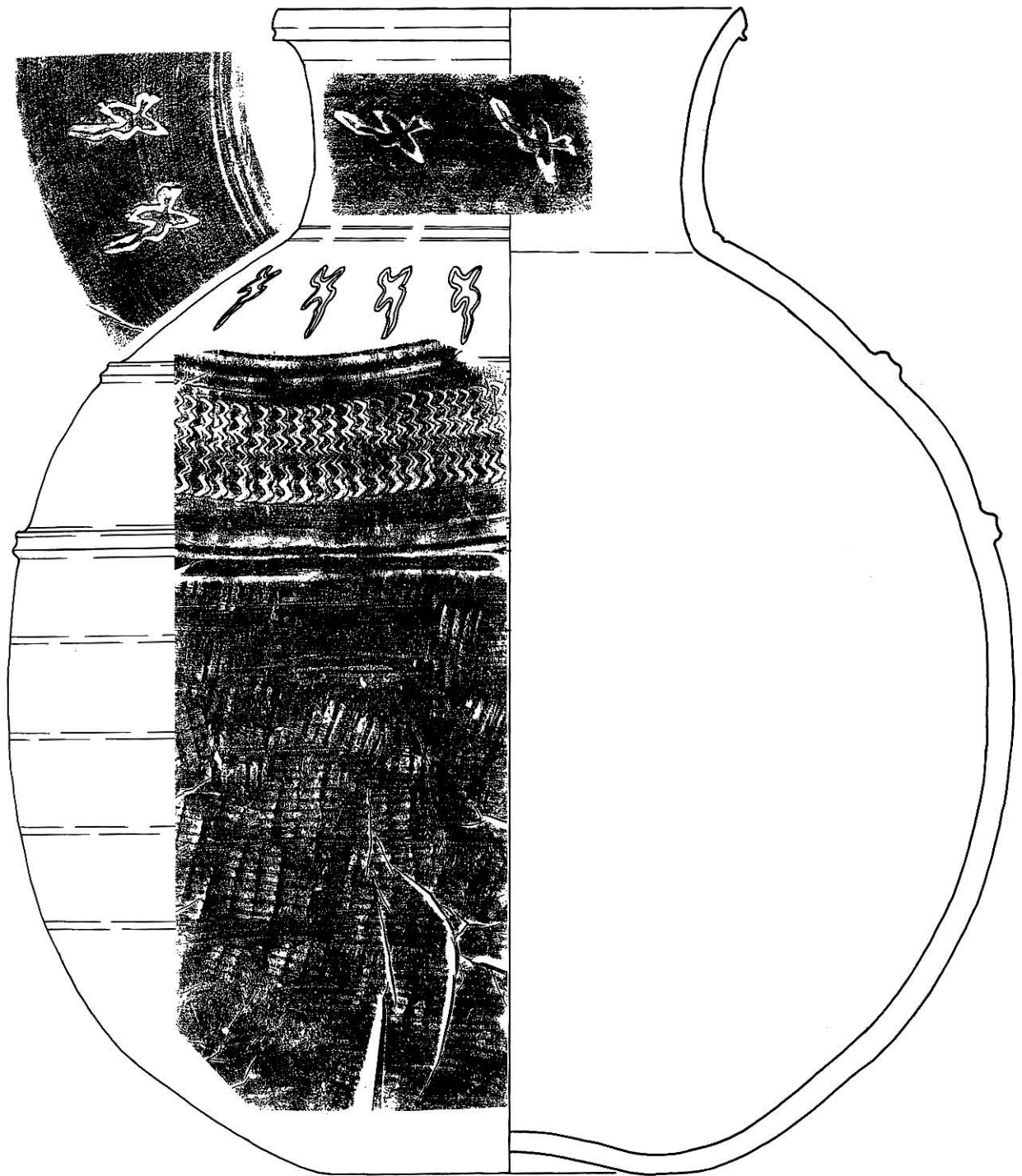
用いられたスタンプは二種類。

頸部と体部上辺にはかなり退化したかたちの大型の「飛鳥文」が方向を変えて施されている。頸部では横向き、体部上辺では縦方向である。

体部上半の二条の突帯の間には「縦長連続文の波形文」をジグザグに施している。筆者のC手法施文である。

本例は新羅印花文土器の変遷の終わり近くに置くことができる。

まず、体部上半に巡らされた二条の太い突線の存在である。このような突線は連結把手付骨壺のB形態、すなわち骨壺変遷の終盤に現れるものであることを根拠とすることができる。またこれだけの大きさの土器にもかかわらず文様が二種類で三段のみに施されていることも新しい傾向である。印花文土器変遷末期に見られる文様数



挿図5 新羅印花文広口壺 S=½

の減少、文様帯の面積の縮小傾向をよく示している。また文様そのものも具象性を失いかけた飛鳥文や大きく蛇行する波形文からなる縦長連続文の形状もそれぞれ新しさを示している。

体部の中位置から底部にかけてみえる「叩き目」についてもこの時期の新羅土器では珍しいものであり、今後の類例の検討が必要である。

本例に類似する資料としては慶州の雁鴨池出土品のなかにいくつが参考になるものがある。文様をもたない大型の壺あるいは甕の形状をとるもので、肩部に数状の突帯が巡っている。

また慶州東國大学のキャンパス内で出土した蔵骨器の外形器にも形状は類似している。この東國大学例では陶質の内容器の蓋に越州窯製の青磁碗を利用していることから九世紀に下るものと見られている。印花文土器の年代観を求めるときには欠かせない重要な出土例である。その外形器の身の部分は大型の壺の体部を利用していたもので頸部から上を欠いているものの、体部のプロポーションは今回報告の広口壺によく似ている。さらに文様はもたないものの、肩部に二条の突帯をもつことも近似している。東國大学例では外形器の蓋は別の大型土器の蓋を利用しているらしいのだが、その蓋の表面には雲気文などの文様をもっている。この東國大学例を参照することによって、本例の位置づけも明らかとなってくる。本例がやや古く、東國大学例はすこし新しい傾向なのであろう。

両者に共通する特徴として、肩部に巡らされた太い二条の突帯に注目したのだが、この突帯はやがて衰退し、凹線に交代するということは、印花文土器の代表例である連結把手付骨壺の変遷過程から推察される^(註)。この凹線ばかりが顕著になる段階にはスタンプ文その

ものもほぼ消滅するようである。その消滅時期は九世紀の前葉頃のことと考えている。

今回報告のこの印花文広口壺は、まだ少ないながら印花文をもち、突帯を巡らすことからみて、筆者分類の4b式にあたる。その製作年代は八世紀後半〜末頃と推定される。

このような広口壺は日本での出土例をみない。その用途が液体の貯蔵のような実用的なものだったからであろう。東國大学校内出土の蔵骨器はその用途を変更した転用例とみられる。

まとめ

今回資料報告をおこなった三個の印花文土器はいずれも完全な形を残したものであった。印花文土器そのものが出土する場合、慶州であれ、日本国内であれ、破片であることが圧倒的に多い。それらの破片資料を検討するうえで、たとえ出土地情報をもたない今回紹介のような資料であっても、完全な形状の作例を詳しく見ておくことは様々な観点から重要であると考えている。

このような具体的な資料の蓄積と、スタンプ文の詳細な観察、そして丹念な検討のうえでこそ、統一新羅時代の土器の様相はより明らかになるものと考えている。

〈註〉

- 1 宮川禎一「大和文華館所蔵の新羅印花文陶器について」大和文華館『大和文華』第八十九号 一九九三年
- 2 宮川禎一「陶質土器と須恵器」至文堂『日本の美術』四〇七号 二〇〇〇年 同書の第三〇図が⁸大和文華館例。
- 3 江浦洋「日本出土の統一新羅系土器とその背景」『考古学雑誌』第七四卷第二号 一九八八年
- 4 宮川禎一「新羅印花文陶器変遷の画期」九州古文化研究会『古文化談叢』第三〇集(中) 一九九三年
- 5 註2文献の第一〇八図の写真が⁸関西大学例。
- 6 宮川禎一「東京国立博物館保管の新羅陶製骨壺」『MUSEUM』四七一 一九九〇年
- 7 註2文献の第三四図が⁸本資料。
- 8 東國大學校慶州キャンパス博物館『東國大學校慶州キャンパス博物館図録』一九九二年。同図録の二二八番の「有蓋骨壺」
- 9 宮川禎一「新羅連結把手付骨壺の変遷」『古文化談叢』第二〇集(中) 一九八九年